



会報特別号

記者と学ぶ

2015.10

はじめに

読売新聞教育ネットワーク事務局です。
 教育ネットワークは昨年10月11日に発足し、1周年を迎えました。
 これまでに明日の日本の貴重な人材育成に携わる大学、小中高校などの教育現場と
 企業や団体などとの橋渡しを行い、出前授業のアレンジや白熱教室、
 シンポジウムなど様々な催しも行ってきました。
 こうした事業を行ってきたのは、分野の違う多くの人や世界と触れることが、
 子どもたちや学生が社会に出る際に、有意義だと信じているからです。

読売新聞では大学を中心に、記者としての経験を踏まえ、
 さまざまな現象を読み解き、社会を知るための講義を実施しています。
 新聞社を離れ、教育現場で学生の指導に当たる元記者もいます。
 新聞社にできる形で社会と教育現場をつないでいきたい、そう考えているからです。

来年度の読売新聞定期採用の内定者の中にも、
 大学で記者出身の教授や現役記者に学んだ経験のある学生も少なくありません。
 この冊子では、4人にそうした記者との学びについて語ってもらいました。
 また、大学で学生の指導に当たっている元記者たちにも思いを聞きました。

記者と学ぶ——多くの学生にとって、新しい世界を知る一歩となれば幸いです。

就活生へのアドバイス

新聞をかじりつくように読め

新聞を読むことが一番大事。最近、新聞を読んでいる姿自体いい印象を持たない若者が多いらしいですが、新聞を読んでいる自分はかっこいいと思ってやってきました。そのくらいの勢いでかじりつくように読んでいけば、ニュースを見る目は半年で養われます。



石澤 達洋 23

金沢大学 人間社会学域 国際学類 4年
元北國新聞記者の宇野文夫特任教授の授業を履修

読売新聞 内定者 座談会

新聞を読んで就活に勝つ

2016年度の読売新聞定期採用で、記者出身の教授のゼミや現役記者による講座などを受講していた大学生が11人内定しました。記者を志望する学生にとって、記者経験者の授業はどのように役立つのか。金沢大学の石澤達洋さん、立命館大学の金井智彦さん、東京外国語大学の浜口真実さん、帝京大学の吉富一騎さんの4人に聞きました。(同会は、吉山隆晴・読売新聞東京本社人事部次長／写真は秋元和夫記者撮影)

動機

「記者を目指すようになったきっかけは。」

石澤 昨年ボランティアでケニアに行った時に、自分の知らない世界を知り、日本で得られる情報と現場のギャップを感じました。それを埋める仕事をしたいと思ったのがきっかけです。
金井 大学に入って、海外に行ったり、スキー部の合宿で長野県で暮らしたり、自分の知らないところに行くことで自分の世界が広がりました。記者なら、もっと自分の

自分の世界を広げたい

の世界を広げられると思いました。
浜口 大学で新聞各社の提携授業を受けて、記者の仕事をもっと知り、おもしろそうだなと思いました。世界中に出かけて、自分の目でいろんなものを見るには、報道にかかわるのが一番だと気づきました。

吉富 大学2年のとき、読売出身の鬼頭誠先生の授業を受けました。それがきっかけで、個人的にもいろいろと教えてもらっているうちに、読売の記者になりたいという気持ちが強まりました。

受けた授業

憲法改正案を作る、記事の添削……

「皆さん、元記者の授業を受けた方ですが、具体的にはどんな授業でしたか。」

吉富 憲法全文を1年通して読み込み、自分で改正案を提案するという授業でした。授業以外にも、当時話題になっていた都知事選のことなどを質問しました。
浜口 1、2年の時には、朝日、毎日の提携講座を受けました。4年で受けた読売の講座は前半が、

現役記者による仕事の内容や今取り組んでいることの紹介。後半は記事や論文の執筆でした。「顔」や現場ルポを、学生が講師に取材する形式で書き、それを添削して返してくれました。
金井 読売出身の岡田滋行先生のゼミを3年から受けています。内容はメディア論。学生個人がそれぞれテーマを持ち、お互い議論しながら理解を深めていくスタイルです。私は日米の地方メディアに

ついて研究しました。
石澤 北國出身の方の授業を受けました。震災や選挙の報道、政権のメディアに対する圧力など、最

新の話題も取り上げてメディア全体を見ていくという、幅広い内容だったので、とても勉強になりました。

記者出身者の授業の特色

視野の広さ、リアルな体験談、報道の裏、理論より現場

「記者出身の先生の授業はほかとは違いましたか。」

吉富 研究者と比べて、視野が広いと思います。こちらが興味本位で聞いたことにも丁寧に答えてくれます。文章の書き方や礼儀の大切さも教わりました。
浜口 記者のどが大変で、何がおもしろいのか、リアルな体験談を生で聞けて、とてもおもしろかったです。

金井 岡田先生は、一つ一つのニュースについて、報じられていることのウラで何が起きているか、個人的な意見も交えて話してくれました。

石澤 理論より現場で見たことの話なので、説得力があります。学生のレスポンスカードも積極的に取り上げて、いろんな人の意見を発信してくれました。

新聞とのかかわり

各紙の読み比べ、社説・コラムの書き写し……

「新聞とはどのようにかかわってきましたか。」

石澤 大学に入ってからも初めは、高校野球の記事を読むために夏だけ朝日をとる程度でした。でも、授業で新聞各紙の読み比べを経験して、論調の分かれそうなテーマでは各紙の社説を読むようになり、自分はどうか考えるのかと

いう問いかけをすることが身についてきました。

金井 高校の時は、ひまなときに読むくらいでしたが、大学に入ってから、図書館に週3、4回通って、各紙を読むようになりました。岡田先生から、新聞はまず全部めくって、何がポイントか押さえてから、読み返せと指導されたので、そう心がけるようになりました。

就活生へのアドバイス

自分で考え、行動を

ニュースをあさりまくれと言いたいです。それから、自分で考えて、自分で勉強した方がいい。自分で考えられない人は、就活もうまくいかないでしょう。



金井 智彦 23

立命館大学 政策科学部 4年
元読売新聞記者の岡田滋行教授のゼミに所属





就活生へのアドバイス

いろいろなことに興味を持って

いろいろなことに目を向けて興味を持つようにしてほしい。学生のうちにいろんな体験をすることが大事。私の場合はイタリア留学でしたが、外の世界を見る、外から日本を見るという面で、いい経験になりました。



浜口 真実 23

東京外国語大学 外国語学部 4年
読売、朝日、毎日新聞の提携講座を受講

した。
浜口 祖母や元記者だった親戚から、新聞を読めと言われていたの、大学に入ってからには、必ず図書館で読むようになりました。文章を書くのが苦手なので、時々、社説や編集手帳をノートに書き写しています。

吉富 夜7時になると、必ずNHKニュースを見るような家だったので、時事問題に関心を持つようになった気がします。高校の時も大学同様、寮生活でしたが、東日本震災の時に一面に載っていた津波の写真のインパクトが強く、新聞を読むようになりました。

就活に役立つ新聞

ニュースを見る目培う、自分の意見を持つ、面接のネタに

新聞を読んでいて、または元記者の授業を受けて、就活に役立ったことは。

浜口 論文の添削は、現役の記者にコメントまでつけて直してもらったことが筆記試験対策にすごくよかったです。また、現役の記者の方の話を聞いて、楽しいことばかりではないことも分かりました。

た。これは面接のときのネタにできました。また、自分流の偏った分野だけでなく、違う分野も読んでいたことも役立ちました。
吉富 集団面接では他の学生より、うまく話せているなあという自覚がありました。読んでいることが自信になりました。自分は駅伝をやっているのですが、「それ以外に何かないの」というような質問にも答えられました。

金井 読み比べを通じて、ニュース一つ一つを疑いぬくようになりました。自分の意見を持てるようになったので、筆記試験や面接で役立ちました。商社も受けましたが、新聞を読んでいたので、経済ネタの質問にも対応できました。

大学で新聞を読んでいる学生は少数派ですか。

吉富 寮に40人くらいいますが、読んでいるのは、私を含めて3人くらいかなあ。

石澤 ニュースを見る目が培われました。気になった記事をスクラップしたり、写真に収めたりして、後から見直せるようにしました。

金井 ゼミの人はテーマの関係上、ニュースに関心はありますが、私が所属しているスキー部の人は基本的には読んでいないですね。

新聞とスマホ

基本は新聞とテレビ、検索はスマホ

スマホと新聞はどう使い分けていますか。

吉富 まず新聞をざっと読んで、興味のある話題や、分からないワードをスマホで検索したりしています。

くり読むという流れです。
スマホだけだと、何か問題がありますか。
金井 インターネットで発信されることをすぐ信じてしまう傾向があると思います。何か一つを読んだせいで、あることについては右寄りなことを言い、別のことについては左寄りなことを言う、一貫性のない人が多いですね。

浜口 スマホでニュースを見ることはあまりないですね。基本はもう新聞とテレビです。
金井 スマホのニュースアプリは頻繁に使っています。スマホはとにかく数をこなす感じで、新聞は詳しく知するために読んでいます。
石澤 スマホはヘッドラインの見出しを見る程度。夜はテレビのニュースを見て、翌朝、新聞をじっ

金井 自分は行動力と瞬発力を生かして、考える前に足を動かすフットワークのいい記者になりたいです。
石澤 粘り強く、泥臭く、しぶとく情報をとるまで諦めない、嫌がられるくらいな記者を目指します。

抱負

体力、行動力と瞬発力、聞き上手、粘り強さ

自分はどんな記者になりたいですか。

吉富 映画の『フォレスト・ガンプ』のように、歴史の中を駆け抜けるような記者生活を送りたい。体力が武器なのでその強味を生かしたいです。
浜口 ちゃんと話を聞いてくれる



就活生へのアドバイス

就活は単独行動を心がけよ

まわりを見ていると、何人かで固まって就活をしている人が多かったけど、一人で行動した方がいい。一人で多くの人に会いに行ったり、孤独な時間を作ってみたりするのも大切だと思います。



吉富 一騎 21

帝京大学 経済学部 4年
元読売新聞記者の鬼頭誠教授、池村俊郎教授の授業を履修

「新聞が映す現代社会」伝える

読売新聞と大学の提携講座



慶應義塾大学で行われている読売新聞提携講座(今年6月)

このほか、読売新聞の記事を活用しながらワークショップバランスについて考える講座(昭和女子大)、読売新聞が発行する英字新聞「ジャパン・ニューズ」の読み方を学ぶ講座(明治学院大学)など多様な講座を提供しています。

「記者の苦労がわかった」「現場の密度の濃い講義」
報道の仕事、新聞メディアに対する理解を深めてもらおうと、読売新聞社は多くの大学に現役の記者らを講師として派遣、「報道現場とメディア論」「新聞が映す現代社会」などの名称で提携講座を開講しています。

代ジャーナリズム総論Ⅰ・Ⅱを開講。読売新聞社の論説委員、編集委員、政治部、社会部、科学部など各部のデスク、記者、日本テレビの解説委員、アナウンサーらが講義を行って来ました。

DVD 「読売新聞の記者講師派遣」完成



新聞活用法、まわしよみ新聞を収録
読売新聞がどのような研修や授業ができるかを説明するDVD「読売新聞の記者講師派遣」が完成しました。「新入社員が新聞を読んでいない」「読み方を知らない」といった企業からの声に応じて作成したものです。

読売新聞では、新聞の活用法をはじめ、文章の書き方、情報の分析や整理の方法、訴求力のある発信の仕方など、新聞取材や編集の中で長年培ってきたスキルから、仕事に役立つ内容を伝えられるような研修を準備しています。

「読売教育ネットワーク」とは

読売教育ネットワークは、「社会はまるごと学校——すべての大人が先生です」を合言葉に、企業や学校間の交流を積み重ね、日本の教育の発展を支援していこう、と読売新聞創刊140周年を記念して昨年10月に創設されました。会員は今年9月現在、65の企業、35の団体、43の大学、172の小中高校、3つの市教委のほか、大学・高校の教員や図書館司書など個人会員は8142人に達しています。

<http://kyoiku.yomiuri.co.jp/>

マスコミ志望者に熱血指導

レポートは添削、コメントをつけて指導

「マスコミは競争倍率も高いので、絶対にジャーナリストとしてやっていきたい、という覚悟を持って取り組まなければいけないと思う。学生が真剣ならこつちも真剣に見る」

立命館大の岡田滋行教授のゼミで指導を受け、新聞社に入社が決まったのは、読売新聞では2011年入社の人畑仁優(読売記者(千葉支局勤務))に続いて政

策科学部の金井智彦さんが二人目だ。彼らを書いてきたレポートにはすべて目を通し、添削をした。マスコミ志望の学生のレポートを見て、「全然だめ」などと厳しい指導もする。

それでもやる気があれば、次のレポートを持ってくる。「持つてこなくれば、それまで」。

学生の覚悟を見ているのだ。

「書くこと、人の話を聞くことは、記者の本質」と語る帝京大の鬼頭誠教授もレポートを見る。「得意分野ですからね」と同教授。

全部で15回の講義でレポートを提出するかどうかは、学生次第。しかし、出してくればすべて添削してコメントをつけて返す。「15回全部出した学生は確実に進歩する。成長が見られるのは楽しみの一つだ」という。

記者出身 実社会とつなぐ役割

実社会での経験を経て教官になった二人は、いわゆる研究一筋の学者とは違う。記者出身としてどんな指導を目指しているのか。

「アカデミックになりすぎると存在意義はない。かとい



岡田 滋行
立命館大学国際関係学部教授
東京大学経済学部卒。1975年読売新聞社入社。ニューデリー、ジュネーブ各支局特派員、アジア総局長(バンコク)。2008年から現職。専門は、情報通信革命と国際ジャーナリズム。

記者出身の教授に聞く

来年の読売新聞の定期採用の内定者のうち、立命館大学の金井智彦さんと帝京大学の吉富一騎さんはそれぞれ、読売OBの岡田滋行・立命館大学国際関係学部教授、鬼頭誠・帝京大学法学部教授の指導を受けていた。どんな授業を行っているのか、二人に聞いた。



鬼頭 誠
帝京大学法学部教授
東京大学法学部卒。1976年読売新聞社入社。政治部記者、ワシントン支局特派員、論説委員、調査研究本部主任研究員。2013年から現職。専門は政治・外交報道、憲法改正問題、安全保障問題、新聞報道、オーラルヒストリー。

色んな新聞を読み比べよう

鬼頭教授は授業で「ツイッターなどのネットの見出しだけを読むのでは役に立たない。色々な新聞を読むように」と繰り返し強調している。

岡田教授は「とにかく書きなさい。書くなら情報を収集し、それを整理する。自分のオリジナルな意見を加え、最終的に他人にもわかるようにまとめ、発信するように」と学生に言うようにしている。

て、現場の話だけをすればなら現役の記者を呼んで話をしても良かった方が早い。その中間を狙っている」と岡田教授。一方、鬼頭教授も「憲法、刑法、民法など、それぞれ専門の教官がいる法学部の環境で、大学生が記者経験のある私と話すことは実社会に出て行く上で、社会を知るいい機会。「社会の窓」役なのかな」と話している。

学生側には「マスコミはいい加減だ」とか、「客観報道なんてない」などの見方もある。しかし「メディアは学生が思っているほど安易な仕事はしていない。情報の入手方法、情報源の秘匿、紛争地域の取材から、紙面を作り上げる際のチェックまで、どれだけ手がかかっているかが、意外と知られていない。そういう誤解を解くのも仕事の一つ」と岡田教授は語っている。

大学の授業で英字新聞

JN記者が指導

東京都野市の明星大学では今年も、読売新聞提携講座「特別講義Ⅰ 現役記者が教える英字新聞のツボ」が開かれました。読売新聞の英字新聞「ジャパン・ニュース(JN)」を教材にした前期15回の講座で、講師は柴崎清孝・英字新聞部記者。9年目となる今年は、実践女子大、帝京大の学生を含む31人の学生が受講しました。

授業の前半は、当日のJNの主要記事を読み、後半は英字新聞に用いられる基本的な語法、政治や経済などのニュースを理解するために必要な基礎知識を学ぶ構成。アジアインフラ投資銀行(AIIB)やイスラム過激派組織「イスラム国」、米サウスカロライナ州の乱射事件に見る人種差別など、その時々に見ている最新のトピックを取り上げました。「日々の英字新聞制作の話や、

自分の取材経験もからめながら、ナマのニュースを扱うようにしてきました」と柴崎記者。6月には、学生たちが班ごとに記事を読み、注目すべきポイントなどを発表するグループワークにも取り組みました。

英語が身近に

「英語を身近に感じられるようになった」「ワクワクしながら毎回の授業を受けていた」。受講し

た学生からはこんな感想が寄せられています。

柴崎記者は「記事に用いられる英語が、中学・高校で学んだ英語や、大学で学んでいる英語の知識を活用すれば、十分に読みこなせることを実感させるようにしています」と説明しています。英字新聞が初めて、という受講生も多い中、「最高の参考書は英和辞書や時事英語の本ではなく、日本語の新聞。英文記事の内容や英単語を推測するために欠かせません」と力説。こまめにニュースをチェックする習慣をつけるよう促しているといいます。

ジャパン・ニュースの記事、70以上の大学で入試に

2015年度大学入試では、読売新聞やジャパン・ニュース(JN)の記事196件が、全国128大学(短大・大学院含む)で取り上げられました。中でもJNからの出題は、ここ数年70件を超えています。2015年度は、高齢者の生活や子どもの貧困、教員の仕事の実態などについて書かれた社説や、NASAが新たに発見した惑星の記事、アニメやアイドルなどポップカルチャーについての記事など、幅広いテーマから出題されました。ほかにも、JNに掲載された提携紙の米「ワシントン・ポスト」や英「ザ・タイムズ」の記事も出題されました。

課題文を読み、内容の正誤選択や適語補充、指定の文章の和訳や英訳をするものが多く、その内容について日本語で小論文を書かせる問題も増えています。英語小論文の出題は、医・歯・薬・看護・保健系学部などで目立っています。



東京本社に引き、行った特別演習で英文作成の課題に取り組む提携講座の受講生たち



The Japan News
by The Yomiuri Shimbun